

「父が遺したもの」

龍 文子（昭和 53 年卒）

昭和 20 年 8 月 6 日 8 時 15 分。広島市の中心街に人類史上初めての原子爆弾が投下された。この日は快晴で、投下地点から約 30 キロ離れている私の実家からも空にくっきりときのご雲が見えた。それを見た祖母は、あまりに大きなきのご雲なので「瀬野（隣町）の機関庫がやられたと思った」と言っていた。

父は市内の崇徳中学に通うため広島駅に降りたところだった。突然の強烈な熱線と爆風。気づいたときは 20m 離れた市内電車乗り場で倒れていた。体は痛さと熱さ、頭は大きな混乱、どうにか立ち上がることが出来、回りを見渡すと景色は一変していた。猛烈な喉の渇きを感じ近くの川に行くと、そこには水を求めて多くの人々が溢れており、すでに亡くなった人も流れていた。そして「天野～ 天野～」父の名を呼び助けを求める同級生の姿もあった。その時父は「川に入ったらだめじゃ。死ぬる」とっさに思ったらしい。友達にどういう言葉をかけたのかわからないが、熱さと喉の渇きに耐え、広島市の隣町、向洋の親戚に行くために線路沿いにただひたすら走った。

親戚に着いたときには息も絶え絶えだったであろう。10 日位火傷や発熱などの看病、食事の世話をしてもらった。家では帰らぬ父を心配した祖父がすぐ下の弟を連れて父を探しに広島市内に通った（汽車は原爆投下の翌日から走った）。名前を叫び

ながら、倒れている人（生死問わず）を杖でめぐり、顔を確認して回った。町は焼け野原、焼け焦げた死体もそこらじゅうに転がっている。そして目には見えない放射能。当時は放射能の危険性をほとんどの人は知らない。「新型爆弾は凄い威力じゃ」これくらいの認識である。原爆投下の後、多くの人が被爆地に足を踏み入れ被爆した。そして祖父も叔父も何も知らないまま被爆者となった。

小康状態となった父はおばさんに付き添われて帰ってきた。祖母は体中包帯で巻かれ、衰弱した父をはじめ誰だかわからなかった。父が名のると「生きとった、生きとった」と、家族で大喜びし、すぐ我が家の布団で休ませた。それからしばらくは「もうだめかも知れん」日々が続き、親戚がたくさんお見舞に来た。父はそれを「わしが死ぬのをみんなが待っとる」と思っていて「うるさかった」と言っていた。毎朝目が覚めると、自分の髪の毛を引っ張ってみて、抜けなかったら「今日も生きとられる」と希望を持った。食料も充分ではない中「わしはそうめんと、カボチャに救われた」と晩年カボチャを食べながらよく言っていた。

それからどのくらい養生したのか聞いていないが、父は崇徳中学を卒業し龍谷大学に入学した。顔のやけどは県外では気味悪がられ、心ない言葉や態度に「嫌な思いをした」と一言こぼしたことがあった。卒業後は中学の国語の教師となり母と結婚した。母が父の被爆をどのように思っていたのかわからないが、「お父ちゃんは木村功に似とる」と言っていたので、脳天気な面食いだっただのかわからない。それはそれでいい。

私の小学生の時には父の右頬にはやけどの後がまだはっきりと残っていた。戦争や原爆のことをまだよく知らない私は一度そこを触ったことがある。つるつるの部分と波打った部分があり、何か言ってくれることを期待して目を覗いてみたが、父は何も言わず、目をそらしただけだった。決して無口ではなかった父が被爆体験をあまり語らなかったことに、私はその傷の深さを思う。

「75年間は草木も生えぬ」と言われた広島はその後奇蹟の復興を遂げた。熱線と爆風で建物は全壊し、死体と負傷者が累々と転がっていたその場所に、戦争が終わり79年経った今、サッカースタジアム「エディオンピースウイング広島」が建設された。この名には「恒久平和と夢や希望を持って明るい未来へ羽ばたく」との願いが込められている。

平和公園で花見を楽しむことも、サッカーの応援に盛り上がることもとても良い。だが私は79年前の広島の惨状と、まだ中学生だった父の被爆体験を決して忘れない。

平和の翼よ

世界に羽ばたけ

合掌

2024年夏